

# 科学新聞

週刊 (金曜日発行)

発行所 科学新聞社  
本社 (〒105-0013) 東京都港区浜松町1-8-1  
電話 03-3434-3741  
FAX 03-3434-3745  
mail:edit@sci-news.co.jp  
振替 00170-8-33592  
購読料 1ヵ月 2,100円 (消費税込)

つくばフォーラム  
2008.7.6  
7面

# 第21期日本学術会議 スタート



総理官邸で行われた任命式

学術会議は20期から3年毎に会員の半数105名を新たに任命することになった。今回、新会員のうち再任は59名(56.2%)、女性会員は1名増え35名(33.3%)となり、継続会員も含めれば210名中43名(20.5%)が女性会員になった。新会員の平均年齢は67.8歳、

## 互選で金澤会長再任 会員の半数105人を改選

日本学術会議は10月1日、第54回総会を開催し、第21期会長に金澤一郎氏(皇室医務主管)を再任した。会員の互選による1回目の投票で、有効投票数156票のうち過半数を超える80票を金澤氏が獲得した。総会2日目には、組織運営および科学者間の連携担当副会長に垣内眞一郎・東京大学大学院学系研究科都市工学専攻教授、政府、社会および国民等との関係担当副会長に鈴木興太郎・早稲田大学政治経済学術院教授、国際活動担当副会長には唐木英明・東京大学名誉教授を指名した。

総会に先立って1日、学術会議のアカデミーとして、年齢は67.8歳、会員全員総理官邸では2期会員の任命式が行われた。麻生総理に代わって、河村健夫・内閣官房長官から辞命が交付された。河村長官は「温暖な地球規模での課題が

## 学術会議の特色生かして 「日本の展望」作成へ 金澤会長に聞く



金澤一郎会長

20期は新生学術会議がスタートして最初の期であった。20期は生まれたての赤ん坊だった学術会議だが、21期になると立派な青年になっている。20期で行っていたこと(56.2%)、着いたかたで評価している(33.3%)、大事に3年間になると認識している。その中で20期の終わりに始めたこともいくつかある。一つは、学部教育に対して文科省から審議依頼を受けた。学部教育の質を証明するために協力して欲しい

これを介して学術会議と学術会議との関係がより緊密になる。もう一つは、学術会議は人文・社会科学を含む学術全体をカバーしているが、総合科学技術会議は科学技術基本法にあるように人文社会科学だけのテーマを取り扱うのが難しい。また、総合科学技術会議は1年後の政策を考えなければいけないが、学術会議は自由で、非常に長いスパンの計画も立てることが出来る。そういう中で、10・30年という長期でそれぞれの学問分野の姿を描くというところは学術会議ならではのところだ。哲学、社会学、臨床医学など、それぞれの専門性を活かした分野別の長期の展望を見る。同時に、1・3部を通して例えはベラルーアーツを通じて、あるいはあるは世界の中で日本はどうあるべきか、持続可能な社会をどう

8・15アカデミーの提言は、国際的にも高い評価を得ている。今年は日本が開催国だったこともあり、学術会議の果たした役割は大きい。さらに学術会議の制度改革では、内閣府公益認定等委員会のガイドラインに学術会議の基本的な機能を盛り込むなどの成果を出している。また20期後半には、文部科学省から審議依頼があった学部教育の質を保証するための方策についての審議や、2002年にまとめた「日本の計画」を補完するための「日本の展望」についての検討も始まり、当面の大きなミッションとなる。改革の3年間を終えて、これからどのような活動をしていくのか。新生学術会議の真価が問われている。

構築するのかなど、全ての学問分野に共通する課題を10個程度選んで、これを横糸と称して、縦糸と横糸で非常にダイナミックな日本の展望を作ろうという委員会を発足させた。これを6年毎にリバイスしていく。次の会員にはより最新の情報を提供していきたい。このように野望を持っている。現在の予定では、来年秋には中間まとめを出し、2010年の4月の総会では「日本の展望」を示したい。

た。振り返ってみると、研究不正などに対応するため「科学者の行動規範」が策定され、さらに日本学術会議の対外的な姿勢である「日本学術会議憲章」を策定し、会員・連携会員の責務と責任を明確化した。この

止めて、見識に基づいて学問全体を見渡す提言や報告を出そうと提言して、それ以降、特定分野を推進する提言や勧告はほとんどなくなった。また黒川先生の時代(19期)で象徴的だったのは、老朽化した南極観測船しらせを新しくする要請を出したとき、「本当は良くないんだけどね」と言われていたこと。そこまで慎重になってしまった。

番を付けていく必要はないと思っている。学問的な比較は学術会議が行う。同じグループの中でそれを優先していくかは、総合科学技術会議の役割だ。やはり方は色々あるが、やるかどうかは大事なことだ。我々はやるようにしている。

吉川先生が会長をされている当時(17・18期)は、学術会議の代表が会員になっていたので、自分の領域を進めようという雰囲気が強かった。そこで吉川先生は、そういう提言は

だとか国際的にも必要だというメッセージを発するべきではなかったかと思っ

具体的には、例えばOEの例などを見ていても、CとAはファーストレイス、BとEはセカンドレイスというように同じ位置にあるというグループ分けをしている。本当に上位位といった順

止めて、見識に基づいて学問全体を見渡す提言や報告を出そうと提言して、それ以降、特定分野を推進する提言や勧告はほとんどなくなった。また黒川先生の時代(19期)で象徴的だったのは、老朽化した南極観測船しらせを新しくする要請を出したとき、「本当は良くないんだけどね」と言われていたこと。そこまで慎重になってしまった。

具体的には、例えばOEの例などを見ていても、CとAはファーストレイス、BとEはセカンドレイスというように同じ位置にあるというグループ分けをしている。本当に上位位といった順